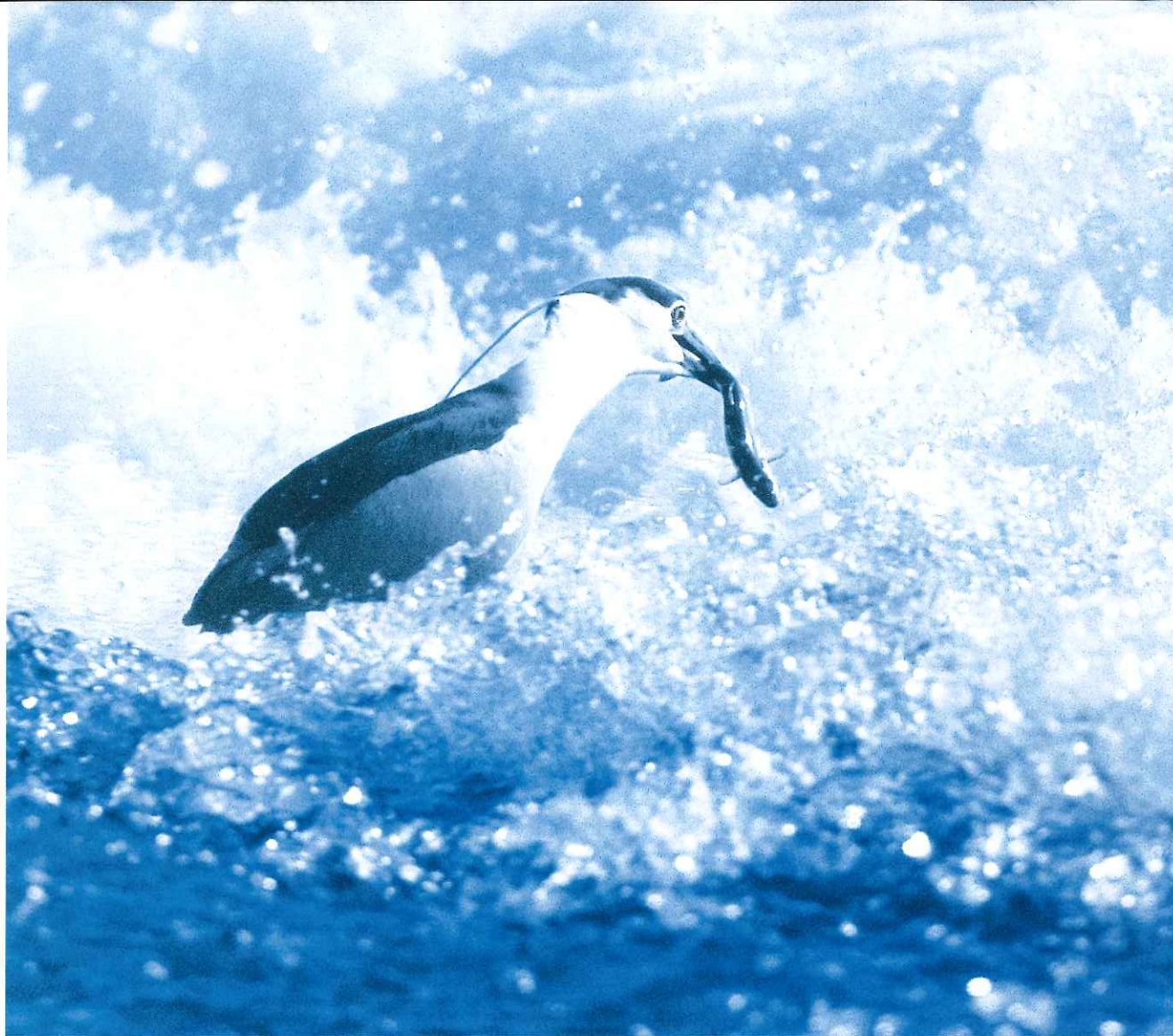


藤並の森

Vol.25

高知県立文学館



●「生きる（野市町物部川）」（写真提供／横田鐵喜）

リレー随筆② 上林暁・川端康成…入野松原の文学碑——平山 三男

△妻繁子儀五月三日午前七時四十分死去いたしました、生前には色々とお心配をいただき有難う存じました、告別式は五月九日午後一時より二時迄自宅にて簡単に営むことにしてゐます。▽川端康成に宛てた上林暁、昭和二十一年五月五日附書簡である。彼の「病妻もの」の代表作、「聖ヨハネ病院にて」は、川端が積極的に関わっていた雑誌「人間」の同年同月号に掲載された。上林と川端の交遊は深く、永い。初めての出会い、上林は△昭和三年の四月の終り、熱海からかへる汽車の中であつた。その前の日に、僕たちは雑誌社の全社員で熱海へ一泊旅行に行つて、翌日の午後東京へかへらうとしてゐたのだつた。熱海の駅で汽車に乗ると、その汽車に川端氏が乗つてゐて、僕は（中略）川端氏の前の席へ坐つたものであつた。▽（川端康成）と記している。

△妻繁子儀五月三日午前七時四十分死去いたしました、生前には色々とお心配をいただき有難う存じました、告別式は五月九日午後一時より二時迄自宅にて簡単に営むことにしてゐます。▽川端康成に宛てた上林暁、昭和二十一年五月五日附書簡である。彼の「病妻もの」の代表作、「聖ヨハネ病院にて」は、川端が積極的に関わっていた雑誌「人間」の同年同月号に掲載された。上林と川端の交遊は深く、永い。初めての出会い、上林は△昭和三年の四月の終り、熱海からかへる汽車の中であつた。その前の日に、僕たちは雑誌社の全社員で熱海へ一泊旅行に行つて、翌日の午後東京へかへらうとしてゐたのだつた。熱海の駅で汽車に乗ると、その汽車に川端氏が乗つてゐて、僕は（中略）川端氏の前の席へ坐つたものであつた。▽（川端康成）と記している。

△妻繁子儀五月三日午前七時四十分死去いたしました、生前には色々とお心配をいただき有難う存じました、告別式は五月九日午後一時より二時迄自宅にて簡単に営むことにしてゐます。▽川端康成に宛てた上林暁、昭和二十一年五月五日附書簡である。彼の「病妻もの」の代表作、「聖ヨハネ病院にて」は、川端が積極的に関わっていた雑誌「人間」の同年同月号に掲載された。上林と川端の交遊は深く、永い。初めての出会い、上林は△昭和三年の四月の終り、熱海からかへる汽車の中であつた。その前の日に、僕たちは雑誌社の全社員で熱海へ一泊旅行に行つて、翌日の午後東京へかへらうとしてゐたのだつた。熱海の駅で汽車に乗ると、その汽車に川端氏が乗つてゐて、僕は（中略）川端氏の前の席へ坐つたものであつた。▽（川端康成）と記している。

△妻繁子儀五月三日午前七時四十分死去いたしました、生前には色々とお心配をいただき有難う存じました、告別式は五月九日午後一時より二時迄自宅にて簡単に営むことにしてゐます。▽川端康成に宛てた上林暁、昭和二十一年五月五日附書簡である。彼の「病妻もの」の代表作、「聖ヨハネ病院にて」は、川端が積極的に関わっていた雑誌「人間」の同年同月号に掲載された。上林と川端の交遊は深く、永い。初めての出会い、上林は△昭和三年の四月の終り、熱海からかへる汽車の中であつた。その前の日に、僕たちは雑誌社の全社員で熱海へ一泊旅行に行つて、翌日の午後東京へかへらうとしてゐたのだつた。熱海の駅で汽車に乗ると、その汽車に川端氏が乗つてゐて、僕は（中略）川端氏の前の席へ坐つたものであつた。▽（川端康成）と記している。

◆次回企画展紹介◆

2004年9月28日(火)～11月21日(日)

川端康成
——
文豪が愛した美の世界

「私は美術が好きで、新古にかかはりなく、なるべく見る折りをつくる。しかし、美術については、ほとんど一切書かぬことにしてゐる。好きか、好きでないか、惹かれるか、惹かれないか、よいか、よくないか、それだけでゆるめられたいとしてゐる。」

——中略——

最高の美にただただ感動するのが生きがひではないか。そこには知識も言葉もない——

「『伊豆の踊子』の作者」

(川端康成全集第33巻)より

川端康成は一八九九(明治三二)年六月十四日、父・榮吉が開業していた大阪市北区此花で生まれました。しかし、康成が満一歳七ヶ月のとき父は結核で亡くなり、その一年後には同じ病で母・ゲンも他界します。康成は祖父母に引き取られますが、七歳で祖母を、十歳で姉・芳子を、十五歳で祖父を失い、孤児となつてしまいます。この生い立ち後の川端文学にも大きな影響を与えています。

川端の自作年譜によると小学生のころは画家を志していたようですが、小学上級に進むと濫説ともいえる読書から志望がかわってゆきました。そして中学時代について「私は田舎町の本屋に来る文学書のめぼしいものはほとんどもらさなかった。本代がたまって祖父と共に苦しんだ。祖父が死んだ後の借金には、中学生としては法外な私の本代もあった」(「独影自命」より)と後年回想しています。また、一九一六(大正五)年一月



埴輪 乙女頭部(古墳時代 5—6世紀)

(十六歳)の日記には、「幼い時から唯大政治家偉人を夢みてゐた」が詩人よりは画家になりたいと祖父に「名所勝景を筆にしながら旅行するの快を説」き、「祖父は畫家たらんとするのにも別にこばみはしなかつたが、かたはらに詩を作れと云つたのをおぼえてゐる」——中略——

文學者の方が重く下つてきたのは祖父の死からの事であつた」と祖父の死と文学志望の關係に触れています。

大阪府立茨木中学校から、第一高等学校、東京帝国大学英文学科(のち国文学科に転科)と進んだ川端は、友人たちと企てた第六次「新思潮」発刊に際して菊池寛を訪ねたことで知遇を得、菊池が「文芸春秋」を創刊したときには横光利一らとともに編集同人として加わっています。関東大震災の翌年、一九二四(大正一三)年に川端は大学を卒業しますが、その年の十月、横光利一、片岡鉄平、今東光ら新進作家とともに「文芸時代」を創刊し、当時の文壇と激しく対立し「新感覚派の誕生」といわれました。

一九二九(昭和四)年、川端は上野桜木町へ転居します。大阪から上京したばかりのころ親しんだ浅草公園通いによって、「浅草紅団」をはじめとする浅草に取材した一連の作品が誕生しています。

このころから色々な展覧会にも出かけたよう、川端家には一九三〇年代の様々な展覧会パンフレットなどが残されています。川端の自作年譜の一九三一年(昭和六)年に「古賀春江を知る」と記されているように、この年からわずか二年という短い期間ながら一人の画家との深い交流がありました。古賀春江(一八五九—一九三三)は、セザンヌ、キュビズム、未来派、クレール、シュルレアリスムなどの影響により次々と画風が変遷していった画家です。川端秀子夫人の「川端康成とともに」には、川端夫妻は一九二八(昭和三)年ころ古賀の絵に惹かれてはじめて二科展を見に行くようになり、ある展覧会で川端が自己紹介したことが始まりだったと記されています。

「末期の眼」には「古賀氏の絵に向ふと、私は先づなにかしら遠いあこがれと、ほのぼのとむなしい廣がりを感じるのである。虚無を越えた肯定である。従つて、これはをさなごころの歌に通ふ。童話じみた繪が多い。單な

る童話ではない。をさなごころの驚きの鮮麗な夢である。甚だ佛法的である。——中略——

中略——

「けだし二人は新しい顔の裏の古い歌で、親しんだのであつたかもしれぬ」と、美術と文学において、常に新しい傾向や形式に自らの表現を追い求めているように見られながら、その根底には佛法的な「をさなごころの歌」があるとしていきます。

この時代の川端は、「私なども日本や東洋を改めて知り、自分の行手も見たいと思ふ者であるが、しかし吾が伝統の埋滅を嘆く心よりも、西洋文化の移入の未熟を悲しむ心の方が、まだ遙かに強い。文藝の日本化や復古論が唱へられるなら、私は反対ではなくとも、それに逆行の気持ちも忘れたくない」(文芸時評「文藝行路」)と日本の古典や伝統に対し否定的な姿勢をとっていました。しかし、太平洋戦争の激化、敗戦という過酷な時を経て「敗戦後の私は日本古来の悲しみの中に歸つてゆくばかりである」(「哀愁」)と深い悲しみの中の伝統、古典への回帰にいたります。

川端は、戦後の混乱した世相の中で古いものに新しい力を見出し、美によって己を支えたと記しています。この頃から川端は積極的に美術品収集を始めます。後に国宝となった池大雅・与謝蕪村の競作「十便十宜図」や、浦上玉堂の「凍雲



国宝 凍雲雪圖 浦上玉堂(江戸時代 19世紀初)

「飾雪図」も戦後間もなく入手したものでした。一九四六（昭和二一）年の財産税創設で名品や名物級の美術品が市場に出ていたという時代背景もありました。

鎌倉の長谷にある川端康成記念館には川端の書斎がほぼ生前のまま保たれています。机の原稿用紙の上には、文鎮として使われていた輪宝、万年筆。右側奥の白磁や竹、象牙などの筆筒には様々な筆が立てられ、織部の硯が置かれています。また、ロダンの「女の手」と「ビクトル・ユーゴー」像も並んでいます。

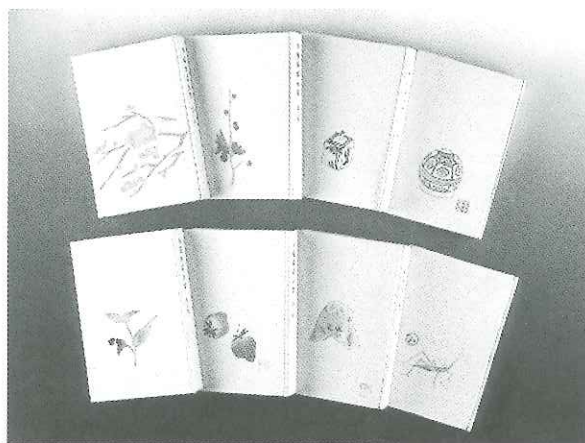
「長い時間、また好きな時に、また見るともなく見られるのは、自分の所になければだめだ」（「マイヨオルのレタ」）と川端は、常に美術品を手元に置いて眺め、その「美」を吸収し、内面化させて作品へと昇華させていったのです。

展覧会は、作家の心を支え、その創作にも大きく寄与した古美術品、愛用の文房具、安田靫彦や小林古径ら一流の画家たちがなした装丁、親しかった画家たちとの交流を物語る絵画など約一三〇点を川端の珠玉の文章とともに展示し、文豪川端康成が目指した美と文学の融合の世界を紹介するとともに、高知出身の上林暁との交流をしめす書簡や、今回新たに発見された川端撮影による写真作品なども特別出品いたします。

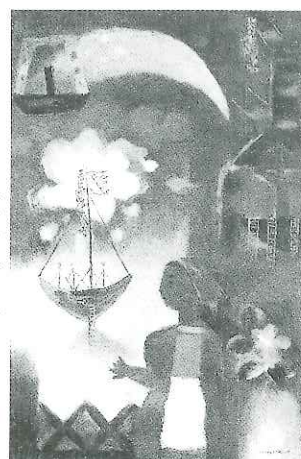
聖徳太子立像（南無仏太子）
（鎌倉時代 13—14世紀）



女の手 オーギュスト・ロダン（19-20世紀）



『川端康成全集』(全16巻)川端康成著／安田靫彦題字・表紙画
(1948—54年 昭和23—29年)



煙火 古賀春江（昭和2年）

■ 関連企画 ■

☑ 記念講演会①（要申し込み／無料）

日 時：9月28日（火）14：30～

場 所：高知城ホール

講 師：川端香男里氏

（財団法人 川端康成記念会 会長・理事長）

☑ 記念講演会②（要申し込み／無料）

日 時：10月23日（土）14：30～

場 所：高知城ホール

講 師：平山三男氏

（財団法人 川端康成記念会 評議員）

☑ 朗読の会（無料）

日 時：9月18日（土）14：00～

場 所：高知県立文学館ホール

☑ ギャラリートーク（要展覧会観覧券）

日 時：10月3日（日）、10日（日）、30日（土）、

11月7日（日）、14日（日）、20日（土）

各日14：00～

場 所：高知県立文学館 2階展示室

主な出品作品

川端康成原稿「美の存在と発見・続」 川端康成 1969年（昭和44）
ノーベル文学賞メダル エリク・リンドバーク デザイン 1968年（昭和43）

ハワイ絵日記 平山郁夫 1969年（昭和44）

川端康成自画像 川端康成 1916年（大正5）

国宝 十便十宜図 池大雅・与謝蕪村 江戸時代 1771年（明和8）

国宝 凍雲飾雪図 浦上玉堂 江戸時代 19世紀初

松岡 尾形光琳 江戸時代 17-18世紀

夢記断簡 明恵成弁（高弁） 鎌倉時代 12-13世紀

俳画「うつくしや」 小林一茶 江戸時代 19世紀前半

麗子喜笑図 岸田劉生 1922年（大正11）

築地草 永井荷風書・画 1915年（大正4）

縄文土偶 女子頭部胸部 縄文時代 紀元前1000-2000年

仏陀頭部（ハッダ仏頭） 3-5世紀

女の手 オーギュスト・ロダン 19-20世紀

赤絵牡丹筒向付 北大路魯山人 20世紀

志野茶碗 加藤唐九郎 20世紀

『川端康成全集』表紙画(画帖) 安田靫彦 1948-54年（昭和23-29）

『千羽鶴』装丁原画 小林古径 1952年（昭和27）

川端康成宛 上林暁書簡

以上、財団法人川端康成記念会蔵
《作品保護のため会期中展示替を行います》

学芸員メモ

月と文学 — 生きて、月を見る —

夕明かりの西空に浮かぶ「三日月」、空を漕ぎゆく舟「上弦の月」、東天にどっかと輝き出る「満月」、そして幾多の逢瀬を見届けた「有明の月」。古来、太陽とともに、「月」はいつも人々に寄り添ってあり、悲しみを、喜びを、ともにしてきた。そして、人々の詩藻を培い、文学の源泉ともなってきた。

上代文学における、「清き明き心」(「古事記」)「明き浄き心」(「続日本紀」)という表現は、「月の光のように清らかで明るい心」を、人の心の理想とした上代人の心がうかがえる。

平安期、「物語出で来はじめの親」と言われる「竹取物語」における「月」の存在の大きさは言わずもがなである。竹から生まれたかくや姫は、成長し、やがて天上の月世界へと還ってゆく。「月の顔見るは、忌むこと」とは、翁の口を借りて語られる当時の人々の月への畏怖心の表れか。魅するものは、ときに魔するものともなった。

紫式部も、和泉式部も、「更級日記」の菅原孝標女らもまた、「月」を追ひ、「月」に心寄せる人々であった。

「やすらはで寝なましものをさ夜更けてかたぶくまでの月をみしかな」(赤染衛門の歌)のように、月が西空に傾き、やがて山に隠れるまで、夜もすがら、空ゆく月を見ることもあった。

「万のことは、月見るにこそ慰むものなれ。」と述べ、「明くるまで月見歩く事」もした、「徒然草」の作者吉田兼好もまた、月に尽きない興味を抱く中世文人であ

あった。その月も「望月のくまなき」にのみ情趣を求めるのではなく、雨の中に見えぬ月を恋い、曉近くの月をも待ち、「木の間の影、うちしぐれたる村雲がくれ」の月影をも愛した。古今、新古今ほか、中古中世の月の名歌は数知れず。

近世文学。芭蕉は、その「奥の細道」の旅、出立への焦燥を「松島の月先ず心にかかりて」と記し、「更科紀行」では、「さらしな里、おぼすて山の月見ん事、しきりにすすむる秋風の心に吹さはぎて」と信州へ旅立つ心はやりを記す。片雲の風とともに、「月」がまず心にかかり、芭蕉の旅情を掻き立てたのだ。

「月天心貧しき町を通りけり」「なかくにひとりあればぞ月を友」の蕪村句しかり。「有明の月に成りけり母の影」の其角句もしかり。この正月に当館で展覧会のあった良寛の「月よみの光を待ちて帰りませ山路は栗のいがの多きに」の名歌も記憶に新しい。



伝貫之筆「月字額」拓本

さて、この土佐との関わりでは、「土佐日記」の作者紀貫之も「月」を愛した文人と言っている。南国市比江近くには

「貫之観月の松」の伝あり。また伝貫之筆「月字額」ありである。

「土佐日記」本文中でも一段とその描写が生彩を放つのは、「亡兄追慕や国人との惜別を除けば」、月にまつわる部分ではないか。一月八日、「今夜、月は海にぞ入る。照る月の流るる見れば天の川出づるみなとは海にざりける」の章。同十七日の晩月夜の船出の章。同二十日の「みやこにて山の端に見し月なれど波より出でて波にこそ入れ」の歌で結ばれる章。そして二月十六日の月夜の桂川渡河入京の章など、その情景が目につかぶようである。

中でも、一月二十日の海上の月の出を見た感動は、海のかなた、唐に渡った阿倍仲麻呂への追慕と重なり、「青海ばらふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」との「天の原」を「青海原」と貫之の脚色の加わった仲麻呂歌を記したあと、「唐」とこの国とは、言異なるものなれど、月の影は同じこととなるべければ、人の心も同じこととやあらむ。」と、たとえ、住む所も話すことばも違う異国人であっても、月の光も、月の光から受ける情感も同じなのだ、と感動の筆を運んでいる。

実際に千余年前、土佐の地で暮らした紀貫之が、唯一土佐に残した筆跡とも伝えられる「月」の字は、日野資枝が「世々遠くあるかなきかの影とめてつきをかたみの水くきのあと」と貫之を追慕し讃仰しただけあって、千年の時を超えて生き続けてきた美がある。

昭和の詩人吉本青司は、その詩「月字抄」に「その月字が標す古代の時を／今は誰も解く人はあない」と嘆じた。

中世五山文学、絶海中津の漢詩集「蕉堅藁」に「東宮の秋月」「千里明月(千里を隔てて明月を共にす)」の詩あり。また近世土佐、今村楽の歌文集(1997年竹本義明編著)には「月見の言霊」と題する一章あり。寛政十一年(1799)七月十六日夕、友人ら五人で、浦戸湾から桂浜龍王宮近くへ月見の船を出したことが記されている。雷鳴も響く不穏な十六夜、雲間の月を愛で、夜中を過ぎて帰る。「そこひなく濁りつくして鏡川みなみきよく月はすみけり」は墓碑に刻まれた今村の辞世歌とのこと。

また、かの坂本龍馬の和歌にも「さよふけて月をもめでし賤の男の庭の小萩の露を知りけり」

の土佐で詠んだ月の歌あり。さらに、姉乙女あての手紙文中にも、「世の中の事八月と雲、実にどつなるものやらしらず」「(慶応二年十二月)と、変転する時世や自身の人生への覚悟を「月と雲」の巧みな比喩で書き送った。

土佐の近代文学においてはどうか。「見よや見よみな月のみの桂浜海のおもよりいづる月かげ」の桂月は、言わずもがな。鏡川に臨む鷹匠公園南の馬場孤蝶文学碑には、「一輪ノ皎月中天ニ輝クヲ見タリ」が彼の著作から抜粋され刻まれた。大方町出身の上林暁には「明月記」「月魄」、田宮虎彦には「須磨の月」の好短編があり、月夜の情景を描いて巧みだっ

閲覧室から



『寺田寅彦と連句』

榊原忠彦 著

連句（俳諧）とは、複数の人が寄り集まり、五七五の長句と七七の短句を互いに詠み重ねていくもの。前句を受けつつその意味を転化させて後句を詠む。前句と後句の関係は近すぎては駄目、遠すぎてもよくない。作法も多く、かなり知的な発想力と遊び心が不可欠だ。文学者としての寺田寅彦は随筆がよく知られるが、本書は寅彦の連句という分野に光を当てている。

寅彦は、俳諧は日本人独自の感覚によるもので、変化に富んだ日本の風土や生活そのものが俳諧であり、俳諧の本質を説くことは、日本の詩全体の本質を説くことであり、やがてはまた日本人の宗教と哲学をも説くことになるであろう。

本書の第一章では、寅彦の連句制作の姿勢が述べられ、第二章では実際に寅彦が小宮豊隆と松根東洋城とともに巻いた歌仙（全部で三十六句から成る連句）が掲載され、鑑賞も加えられている。連句の細かい作法を知らずとも、次々と展開されていく鮮やかな連想の妙味を存分に楽しめる。

△近代文芸社

2003年12月

1,890円V



川端康成の題簽

た浜本浩の絶筆は「平壤の満月」であった。

精神を痛む妻が小康を得、一時退院するまでを清らかに描いた上林暁の「明月記」は、初め「名月」で出稿したが手違いで「明月」になり、その後「川端康成氏から手紙が届き明月記を感銘深く読んだとあつた」ことから「明月記」を決

定題にしたという。「明月記」は昭和十八年春、川端の題簽を得て、世に出る。

「病院を出ると、蟬（せみ）の音が、あたりを取り巻いていた。月は中天に澄んでいた。一旦病ひを得た妻を擁して、行路を思えば、懸念は果しなかった。しかし、七、十日振りに、妻を家に迎えることを思えば、胸がときめいた。元春は、さまざまのことを考える必要があるような気がしながら、月明りの道を、黒い影になつて帰って行つた。」

一時退院の妻とともに家路をたどる明月のラストシーンは、ことに美しい。

上林はその若き日、雑誌「改造」の記者として川端康成と親しく交流し、あの名作「禽獣（けいじゅう）」原稿を粘り待ち、遂に得

た、名編集者でもあつた。

その文豪川端康成もまた、「月」に、さまざまな縁がある。

「私は月があれば月を見る。しかし月を見ると、いつも日本のかなしさといふやうなものが身にしみる。」（『月下の門』）と、最も身にしみた戦争中の冬の月の思い出を語る。すでに敗けいくさの中、鎌倉の人家もまばらな小さい谷で、毎夜の夜まわりだけはしたという川端。「燈火管制で明りが一つもない、寝静まった谷の冬の月は、日本のかなしみで私を凍えさせるやうだつた」という。

そんなに身に沁みながらも、彼は月を見る。月を見ること、見られたことも、「生きてゐるしるし」という。

「永遠の文学などといふものは、もう作れない時代が来たか」と哀しみつつも、世を超えて生きる、真の美を求める心と通じるものが、そこにはある。

世は移り、変わらぬものは何もない、といつてもいいほど変わったが、千古変わらぬ「月」は、昔のままの、その清らかな光を注いでくれている。

阿倍仲麻呂が望郷の思いで中国の海辺で見た月、在原業平が昔の恋人を偲んで嘆き見た月、紀貫之がこの土佐で見た月、田岡嶺雲が上海で見た月、病む妻とともに上林暁が家路をたどつた月、そして川端康成が「生きて、見た」月を、心凝らして、その文学とともに鑑賞したい。

（別役佳代）

県内同人誌紹介

『蒼空』



創刊号の発行は一九九六年八月。その発行にむけて、高知文学学校研究科生の島総一郎、だてようすけ、西内美武、橋詰千登世、渡辺智恵の五人で「文芸五人の会」を作り、高知の澄明な大気、空を本のイメージとして誌名を「蒼空（そうくう）」と決めた。

以来一年に一冊発行している。目下九号の原稿書きに頭を悩ませている。それぞれ生活のなかから生まれる作品ばかり。できうるならば、生きる「いま」を反映し、残したい、という同人の願いがこめられている。「文学界」や「民主文学」などの同人誌評論に取り上げられるなど、着実に地道に創作活動をつづけている。八年の間に橋詰千登世さんは故人となり、四号から中城洋子が、五号から麻岡道子が加わった。ただいま六人の同人で運営している。

発行所 高知市一宮三〇二九一六

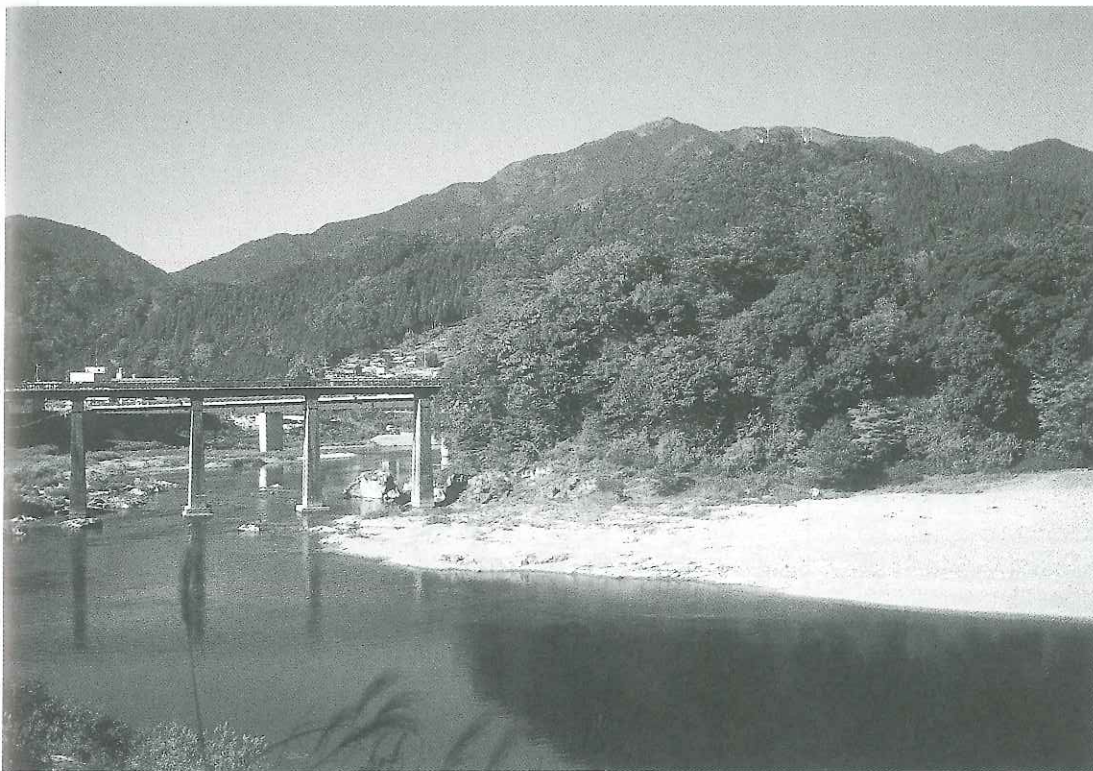
渡辺方 〇八八・八四五・七三三

発行者 蒼空の会代表 渡辺智恵

吉野川ふるさと残像

大原 富枝

猪野 睦



本山町を流れる吉野川と帰全山

ふるさとを思いのこもる筆致で書ける作家がへった。時代ということもあろう。戦後半世紀をこえ、ふるさとそのものの解体、いや変貌といつていいか、人びとの昔からの暮らしの続いてきた町村も、大きな道ができビルが建ち、平均化された風景が多くなっている。

戦後まだ十年ばかりたつていたろうか。高知から本山へは土讃線でトンネルを抜け、大杉からボンネットバスで、吉野川に沿うカーブの多い道を小一時間はかかった。坂道できている本山町は嶺北の中心地で、風格のある老舗の旅館をもつ町だった。

六月の雨期だったか、その旅館の通りで蛇の目傘の女人をみかけた。雨の日の傘の色がその下の女人の顔を染めあげ、ぼっと映えているのをぼっと見返ったことがあった。ありふれた日常だったろうが、小津安映画の一駒のように印象に残った。まだ旅館利用者も多い時代だった。

そこから田井へたどる道も吉野川の清流に沿っており、それを挟む山の遠景が山紫水明という言葉をおこさせた。むしろ今は変わった。田井は早明浦ダムができ、ビルが建ち風景も荒れた。

もうこういう時代、それ以前の時代の風景と、そこに住んだ人びとを再現するよう書きあげる作品を、いまでは求める方が無理というものだろう。こんな時代をさかのぼった頃からの吉野川のほとりを、川霧のなかから立ちあらわれるように書いたのが、大原富枝の『吉野川』だった。一九九七年、なくなるすこし前に書きおろした『吉野川』は、いま本山町になっている旧吉野村寺家をじっくり書きこんでいた。

大正期から昭和戦前の吉野川上流の暮らしと風俗をかきあげた名品ともいふべきものであった。いくつしむように少女時代、そして父の青春と母、そのこし方を手放しかいてる寺家幻想ともいえる回想だった。大原富枝は一九二二年、つまり大正元年、寺家にうまれた。語尾をはねる独特のアク

セントをもつ言葉の地方であるが、それを聞いて育った。少女時代からの結核をこの寺家でいやし、作家を志望し、一九三八年、同人誌『文芸首都』に「祝出征」を書いて芥川賞候補になる。つづいて続篇ともいうべき「蚕飼乙女」などを書いていく。

「蚕飼乙女」は日中戦争がはじまり若者が狩りだされていくなかでの農家の実状、蚕を飼う女たちの日常を描いた。朝霜が降り桑の芽が焼かれる。蚕の掃立てから上簇までの男のいない眼のまわる日々を描出していくが、村では満州移民、大陸移住の話もすすんでいく。寺家を舞台にリアルに戦中農村を描いた農民文学作品といつていいものだった。これは一九四三年、新民書房から「祝出征」として刊行された。

大原富枝は戦後になって多くの作品をかいたが「風のなかのあなた」に「波濤は歌わないう」など、わが身辺を高知を舞台にして書きあげもした。だが大原富枝の文学は、ふるさと寺家をかけた「祝出征」「蚕飼乙女」にはじまり、晩年の『吉野川』に回帰していったといつていいのではあるまいか。

昔は川舟だったという田井から対岸へわたり、寺家の車道から、傾斜の道をすこし上ると大原富枝実家跡があり、一帯は住宅地になっている。おそらく大原富枝が文学的出発をはじめた頃のここからの眺めは、一帯に桑海が広がっていたのではあるまいか。

本山町には大原富枝文学館があり、その前に文学碑があり、最近、実家跡地などをめぐる「大原富枝文学散歩道」も五キロのコースが整備されている。

見どころ ●大原富枝文学館 ●帰全山公園

●早明浦ダム

交通 ●JR大杉駅下車。バス二〇分。

県交通バス田井行き本山プラチ

ナセンター前下車二分。高知龍

馬空港より車で五〇分。

祝 壺井繁治賞

さる四月、猪野睦氏の詩集「ノモンハン桜」が第三十二回壺井繁治賞に輝きました。心よりおよろこび申し上げます。

資料受贈報告

(平成十六年三月・平成十六年五月)

敬称略

▼徳弘辰彦・「詩集」晴れのち晴れ
徳弘辰彦 ふたば工房▼小松弘
愛・「詩集」銃剣は茄子の支えに
なつて 小松弘愛 花神社▼井上
自由・自由の泉 井上自由 文芸
社▼加藤信一・加藤信一論文集
加藤信一 良寛研究所他▼森下時
男・安岡章太郎15の対話 安岡章太
郎 新潮社他▼ふたば工房・カシ
オペア2004 カシオペア200
4 世話人の会編刊▼立花末美・
「歌集」夕映えの書舗から 立花
一臣 立花末美▼細川幹夫・安徳
じゃが浮かびたい 安徳天皇の四国
潜幸秘史 細川幹夫 麗澤大学出版
会▼高知ペンクラブ・高知芸芸年
鑑17号 高知芸芸年鑑編集委員会
高知ペンクラブ▼平尾基金・平尾
賞の25年 高知新聞企業編 平尾基
金▼坂倉瑠香・岡本彌太 琴歌抄
橋詰延壽編 高知縣文教協会▼
横田晴光・牛の来た道 板原伝 文
芸士佐編集委員会他▼西岡寿美
子・「詩誌」二人創刊号(一九六三
年)から二四〇号(二〇〇二年)ま
でを八分冊 西岡寿美子編 二人発
行所・「詩誌」二人は一九六三
(昭和三十八)年二月二十日創刊さ
れた同人誌です。同人は西岡寿美
子、大崎二郎のお二人で創刊から現
在まで四十一年余り、隔月刊・年六
回の刊行を確実に守り現在までに二
四九号を数えています。館報「藤並
の森vol.10」の同人誌「二人」の紹介
コーナーで西岡さんは「大崎は社会
派詩人として、西岡は無告の民の声

◆◆◆ 文学館日誌 2004年3月～2004年5月 ◆◆◆

3月

◆4日 演劇公演ビデオ上映会「花の命」放浪のひと林美美子」午後1時30分～3時。文学館ホール。参加者30名。◆6日「文学・青春展」ギャラリートーク。午後2時。〈担当者学芸員による展示解説〉2階企画室。参加者3名。／かみしばい研究会7名。◆10日 ミュージアムネットワーク総会。参加者33名。／菊池寛記念館2名様ご来館。◆13日 第6回文学カレッジ（6回目）「寺田寅彦の回想作品」講師：沢英彦氏。文学館ホール。受講者70名。◆16日 北川中学校生徒9名、引率者3名観覧。◆18日 文学館運営協議会。参加者15名。◆20日 第48回朗読の会―郷土作家の作品を読む―第1部、第2部。午後2時～午後4時まで。文学館ホール。参加者54名。◆21日「文学・青春展」終了。

4月

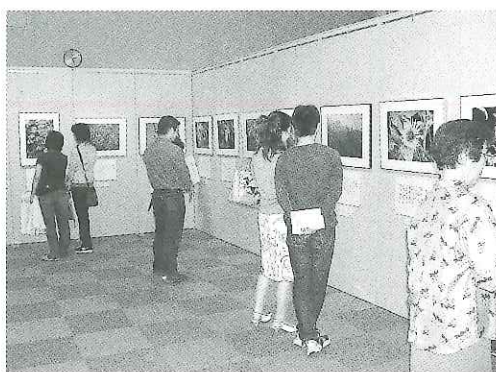
◆3日 昔ばなし大学実行委員会。参加者50名。◆4日 昔ばなし大学実行委員会。参加者40名。◆10日 岡田憲佳写真展「金子みすゞ・思い花」開幕。／かみしばい研究会10名。◆17日 第49回朗読の会「花とみすゞ」第1部、第2部。午後2時～午後4時まで。文学館ホール。参加者34名。◆24日 第7回文学カレッジ（1回目）「桂月の歌碑行脚、こぼれ話」講師：澤田輝夫氏。文学館ホール。受講者55名。◆25日 日本文学原作の映画上映会「智恵子抄」（1967年）松竹。105分。第1回上映。午前10時～午前11時45分。解説午後12時20分～午後1時。光と影を宿す「智恵子抄」講師：山川渚彦氏。午後1時10分～午後2時55分。文学館ホール。参加者81名。◆29日「金子みすゞ・思い花展」ギャラリートーク。午後1時30分～午後3時。〈岡田憲佳氏による展

5月

◆1日 開館時間延長（5／1～5／4）午前8時30分～午後6時。（高知城の延長に合わせて）◆8日 かみしばい研究会10名。◆14日 中谷宇吉郎「浦島太郎」復刊記念コンサート。午後2時～午後3時30分。文学館ホール。参加者60名。◆15日 第50回朗読の会―5月に―随筆と



金子みすゞ思い花展・ギャラリートーク



金子みすゞ思い花展・展示風景



「浦島太郎」復刊記念コンサート

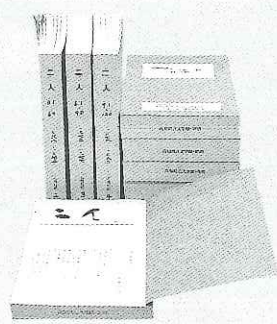
翻訳物を読む●第1部なだいなだ著、●第2部オルダス・ハックスリイ作。午後2時～午後4時まで。文学館ホール。参加者20名。◆16日 北海道「四国文学散歩」団体33名様観覧。◆20日 文化厚生委員会視察15名。◆22日 第7回文学カレッジ（2回目）「上佐の古典文学への誘い」「土佐日記」から「土佐源氏」まで」講師：井出幸男氏。文学館ホール。受講者50名。◆27日 追手前小学校生徒50名様観覧。◆30日「金子みすゞ・思い花展」終了。期間中入館者2、229名。

を掘り起こす作業をと、それぞれの姿勢を貫いて来たと見えようか「数人から数十人が抱える大部の傍らで、『二人』は片々とした十頁そこらの超ミニコミ誌であるが、発表の場の大小と誌質はイコールではなからう」と述べられています。

長い年月に渉る優れた活動の中でそれぞれ数多くの詩集を刊行されており、これらによって西岡さんは「高知県出版文化賞」「小熊秀雄賞」「日本農民文学賞」「富田碎花賞」を、大崎二郎さんは「椋庵文学賞」「第二十四高知ペンクラブ賞」「壺井繁治賞」「小熊秀雄賞」を受賞されています。

このような継続的な刊行物はバツクナンバーが揃っていることが大変大事なことです。当館のように設立が新しい館は特に歴史の古い刊行物の収集に苦勞しており、この度のご寄贈はそのような意味からも大変有難く感謝いたしております。

このほか、全国の個人、関係機関の方々から数多くの資料をご寄贈いただきました。厚くお礼申し上げます。



詩誌「二人」

高知県立文学館カレンダー

2004年

7～9月

7月—July

8月—August

9月—September

日本文学原作の映画上映会

『箱根風雲録』(1952年・新星映画社・前進座・136分)

原作/タカクラテル「箱根用水」

監督/山本 薩夫

出演/河原崎長十郎、山田五十鈴

中村翫右衛門、轟夕起子ほか

〔日 時〕 8月29日(日)

・第1回上映 10時00分～12時16分

・解 説 12時30分～13時10分

高橋 正氏 (元徳島文理大学教授)

・第2回上映 13時20分～15時36分

〔場 所〕 文学館1階ホール

〔入場料〕 500円

〔定 員〕 各100名 (各回先着順)

【主催】 小夏の映画会・高知県立文学館

第7回 児童生徒文学作品朗読コンクール

◆地区審査(県内3会場)※申込〆切7月31日(土)

・大方会場…8月20日(金) 大方あかつき館

・安芸会場…8月24日(火) 安芸市民会館

・高知会場…8月26日(木) 高知県立文学館

◆県審査(公開)・記念講演会

<日時>11月28日(日) 13時～16時

<場所>高知県立文学館 1階ホール

・記念講演会/講師:岡野薫子先生

演題:「ファンタジーの発想と展開」

企画展 「みる・きく・あそぶ マザー・グース展」～月なんかひとつとび～

2004年7月3日(土)～9月5日(日)

<料金>一般550円(常設展含む)、高校生以下無料

◆協力: NPO法人高知こどもの図書館・島 多代・
ミュゼ・イマジネール・木曜社・安田幸子

■関連行事(高知こどもの図書館5周年記念事業)

*ギャラリートーク ※要観覧券

「挿絵でみるマザー・グースの世界」解説: 安田幸子氏

7月4日(日)・18日(日) 14時～15時

<場所>文学館2階企画展示室

*記念講演会「センス・オブ・ナンセンス」

講師: 島 多代氏 (ミュゼ・イマジネール主宰)

7月24日(土) 14時～16時

※参加費1000円(高知こどもの図書館会員800円)

<場所>文学館1階ホール

*マザー・グースであそぼう ※要観覧券

7月25日(日)・8月22日(日) 14時～14時半

講師: 市川みどり氏 <場所>文学館2階ロビー

*コンサート「マザー・グースを歌おう」

8月1日(日) 14時～15時 ※入場料500円

演奏: グループFAM <場所>文学館1階ホール

*マザー・グースを描こう ※要申し込み(小学生対象)

8月8日(日) 13時～16時 ※材料費500円

講師: 織田信生氏 <場所>文学館1階ホール

*わらべうたであそぼう ※要観覧券

8月29日(日) 14時～14時半

講師: 岡本悦子氏 <場所>文学館2階ロビー

※関連行事のお問い合わせ・お申し込みは、高知こどもの
図書館まで。(TEL:088-820-8250)

ミニ企画展 9月10日(金)～9月18日(土)

新しい詩のかたち～高知の若い詩人とその仲間たち～第1集

高知を中心に活動する若手詩人たちによる作品発表。パフォーマンスなども同時開催 ※入場無料

【休館日】7月—5, 12, 20, 26日 8月—2, 9, 16, 23, 30日 9月—6, 13, 19～27日

次回企画展紹介

川端康成—文豪が愛した美の世界

9月28日(火)～11月21日(日)

<料金>一般1000円、高校生以下無料

※会期前後(9月19～27日、11月22～26日)は、展示物入替のため臨時休館となります。

◆川端香男里氏講演会 9月28日(火) 14:30～ 於:高知城ホール

◆平山三男氏講演会 10月23日(土) 14:30～ 於:高知城ホール

利用案内

開館時間 午前9時～午後5時(入館は、午後4時30分まで)

休館日 毎週月曜日(休日・祝日の場合はその翌日)
年末年始(12月26日～1月1日)

観覧料 一般350円
特別企画展のあるときは、料金が変わります。〔上記参照〕
20人以上の団体は2割引。高校生以下、高知県(市)長寿
手帳所持者及び身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者
保健福祉手帳、戦傷病者手帳、被爆者健康手帳所持者と
その介護者1名は無料です。

駐車場 なし。ただし近辺に有料駐車場があります。

貸出施設 企画展示室、ホール、茶室

交通のご案内



- 高知空港より空港バスではりまや橋下車徒歩20分
- JR高知駅下車徒歩20分
- 土佐電鉄高知駅前下車北へ徒歩5分
- バス停公園通り下車北へ徒歩5分

高 知 県 立
文 学 館

高知市丸ノ内1丁目1-20
電話 088-822-0231
FAX 088-871-7857
〒780-0850